



寄稿
東塚会員が西田賞を受賞	01
川幡会員が文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞	02
白井会員が文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞	02
情報
「気候形成・変動機構研究連絡会」の発足	03
学会記事
春季大会報告	07
学会賞他受賞候補者推薦依頼	09
環境科学賞受賞候補者推薦依頼	09
通常総会議事録	10
2018年度決算および2019年度予算報告	11
連載
アカデミア メランコリア	15



寄稿 ①

東塚 知己 会員が第3回地球惑星科学振興西田賞を受賞

東京大学 大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 日比谷 紀之

2019年5月に千葉・幕張メッセで開催された日本地球惑星科学連合2019年大会において、本学会の東塚 知己会員が「熱力学的な視点に基づく中低緯度の気象海洋相互作用に関する研究」により第3回地球惑星科学振興西田賞を受賞しました。

東塚会員は、東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻博士課程在籍時より一貫して、データ解析および数値実験を通じて大気海洋相互作用に関する研究を推進し、新しい発想によって次々と優れた研究成果を挙げてきました。例えば、年周期のエルニーニョ・南方振動(ENSO)の発見は、国際的にも高く評価され、アメリカ気象学会機関誌(*Bulletin of the American Meteorological Society*)においてハイライト研究に選ばれました。また、海洋大循環モデルの感度実験により、南シナ海通過流が、グローバルな気候を支配する海洋コンベアベルトの一部であるインドネシア通過流の熱輸送に大きな影響を与えていることを明らかにするとともに、この南シナ海通過流の強弱が熱輸送への影響を介して海盆規模の現象の発現頻度を制御している可能性を指摘しました。この指摘は、最終氷期の研究など、海洋物理学以外の分野にも大きなインパクトを与えています。最近では、中緯度水温前線域の気象海洋相互作用に関する研究でも重要な成果を挙げており、海洋表層の混合層における熱収支解析を通じて、これまでの定説とは異なる大気海洋相互作用の存在を明らかにしました。

このような東塚会員の研究は高く評価されており、国内では、日本海洋学会岡田賞を20代の若さで受賞しました。国外でもその卓越した研究成果が評価され、2010年から3年間、海洋研究科学委員会(SCOR)の第126作業部会に大気海洋相互作用の専門家として参画したほか、2014年からの5年間は、気候変動及び予測可能性

研究計画(CLIVAR)のインド洋パネルの委員として活躍しました。また、アメリカ地球物理学連合のレター誌 *Geophysical Research Letters* や、アメリカ気象学会の専門誌 *Journal of Climate* の編集委員としても活躍し、2014年には、アメリカ地球物理学連合の専門誌である *Journal of Geophysical Research-Oceans* の2013 Editor's Citation for Excellence in Refereeing も受賞しています。

今回の東塚会員の受賞は、同会員の新しい発想に基づく優れた研究成果とともにこのような国際的な活躍が高く評価されたものです。表彰式は5月28日(火)の夜、東京ベイ幕張ホールにおいて行われ、受賞の際には海洋学会員のみならず参加者全員より盛大な拍手が送られました。

今回の受賞に際し、東塚会員に心からお祝いを申し上げるとともに、今後も本学会をはじめ、広く地球惑星科学分野で国際的にますます活躍されることを心より祈念致します。



受賞の後、笑顔の東塚会員と日比谷前会長(推薦者)



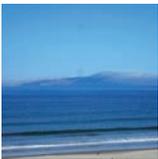
寄稿 ②

川幡 穂高 会員が文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞

東京大学大気海洋研究所 津田 敦

川幡 穂高会員が文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受け、2019年4月17日に文部科学省において表彰式が行われました。本表彰は科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としています。受賞タイトルは「古環境推定指標の高度化と気候・環境の時系列解析研究」です。現在、人為的要因による全球的な環境変化として海洋では温暖化・酸性化が顕在化しつつあります。数値モデル等による将来予測が行われていますが、不確定要素が大きく、それを改善する一つの方法が、過去の環境変動を明らかにすることによって、モデルの問題点を改善していくという方法があります。川幡会員の第一の功績は太平洋の広範囲を対象とし系統的なセディメントトラップ観測を行い、沈降粒

子束と海洋環境の関連を明らかにしたことです。沈降粒子は海底堆積物の源となる有機物で、大洋スケールで季節変動を含む沈降粒子の動態が初めて明らかとなりました。次に、フィールド調査および水温や炭酸系の平衡状態を精密にコントロールした室内実験を駆使し、Sr/Ca、U/Caなど古環境推定指標(プロキシ、proxy)を開発・高度化し、堆積粒子の時系列解析に応用し、古気候・古環境を精度高く復元しました。特に、日本列島の南北地域では高精度の気温推定法を用いて過去3,000年間の気温を復元し、平安時代前期が最温暖期で、変動幅は西日本で2.1℃、北日本で4.6℃であったこと、寒冷期は日本の社会枠組み変革期に対応していたことを明らかにし、その知見は海洋科学にとどまらず人文社会科学にも影響を及ぼす成果となっています。以上のように川幡会員は地球史的な視点に立脚した地球環境変化の理解を提唱しています。



寄稿 ③

白井 厚太郎 会員が文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞

東京大学大気海洋研究所 津田 敦

白井 厚太郎会員が文部科学大臣表彰若手科学者賞を受け、2019年4月17日に文部科学省において表彰式が行われました。本表彰は科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としています。受賞タイトルは「生物起源炭酸塩の元素変動機構と古環境指標開発に関する研究」です。白井会員の主な業績には二つの柱があります。一つは炭酸塩組織の微小領域において元素分布が不均一であることは知られていましたが、白井会員はサンゴや二枚貝など複数の硬組織を持つ生物において、微細領域の元素分布と微細骨格構造、硫酸濃度、有機物と強い相関があることを明らかにし、石灰化を制御する有機物が元素組成を決定すると

いう、生物起源炭酸塩に普遍的な元素変動機構を明らかにしたことです。二つめは、東北・北海道沿岸域に生息するピノスガイ(大きさや形はホッキガイに似るが美味しくない二枚貝)が極めて長寿(約100年)であることを、貝殻の成長線編年学と分析化学手法を融合することで明らかにし、その成長履歴解析から、西部北太平洋における数十年機構変動を明らかにしたことです。さらに、白井会員は、東日本大震災と前後して、岩手県大槌町にある国際沿岸研究センターに赴任しており、共同研究者とともに震災後の底生生物群集の変化や、貝類の成長解析と微量元素分析を組み合わせた手法で、震災の影響を明らかにする研究を行っています。今回の受賞対象にはなっていませんが、これらの成果の発信にも今後大いに期待しています。



寄稿 ④

Wallace Smith Broecker 教授のご逝去を悼む

東京大学大気海洋研究所 教授 川幡 穂高

本年2月18日に、米国のコロンビア大学ラモント・ドーハティー地球科学研究所(Lamont Geological Observatory 後に、Lamont-Doherty Earth Observatory)のWallace Smith Broecker教授が亡くなりました。享年87歳でした。

私は、Broecker教授には1度しかお目にかかったことがないのですが、Broecker教授の著書の日本語訳を出版したこともあり、日本海洋学会前会長 日比谷 紀之先生より追悼の記事を執筆するよう依頼されましたので、ここにBroecker教授のご活躍の軌跡をまとめたと思います。

Broecker教授は1931年11月29日にシカゴで誕生されました。アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ郊外のウィートン(Wheaton College)にある私立の福音主義の大学で学んだ後、ニューヨークにあるコロンビア大学地質学教室で1958年に博士号を取得されました。とても優秀だったので、翌1959年にラモント・ドーハティー地球科学研究所の助教授に着任され、1964年に同研究所で教授に昇進されました。

Broecker教授は地球化学者として出発しましたが、地球科学全般の研究をしてきました。第四紀の特に放射性核種を用いた年代決定、安定同位体や放射性核種を用いた海洋化学

および海洋循環に大きな業績を挙げられました。現代の地球表層の生物地球化学循環や氷床コアや海洋堆積物に記録された過去の気候変動の研究も行い、500以上の論文を発表されました。特に有名なのが、海洋の専門家以外の地球惑星科学の学生でも広く知られている、地球的規模の海洋循環とリンクした「海洋コンベヤーベルト(ocean conveyor)理論」です。過去258万年間の第四紀は氷期・間氷期が特徴ですが、これはミランコビッチサイクルと呼ばれる日射量変動で説明されてきました。地球表層システムには、これよりはるかに短時間で急激に変動する気候イベントが存在し、海洋循環のイベントが気候イベントに大きな影響を与えてきたことを明らかにしました。この「海洋コンベヤーベルト理論」は単なる「海水の流れ」とどまらず、過去から現代そして未来に通ずる、炭素循環に関する研究、古気候・古海洋学研究へと発展しました。もともと、海水移流・拡散を定量的に把握するには、炭素のみならず原子量の大きな放射性核種の観測・分析が必要となりますが、Broecker教授は精力的にこの課題に取り組み、大学院生も育てながら多くの論文を発表されました。Tsong-Hung Peng教授と共同執筆された「海洋におけるトレーサー(Tracers in the Sea)」は、この分野のバイブルとも呼ばれる教科書で、四半世紀を経た今でも読み継がれ、引用されています。海洋の物質循環の観点から、海水の移動を考えるベースを海洋学者全体に提供し、地球環境全体に及ぶ学問の進歩を大きく促進させました。

最近、地球のあるいは地域的規模で平均気温が上昇し、最高気温を塗り替えるような事態となり、「地球温暖化(Global Warming)」はニュースでも頻繁に取り上げられ、一般市民にも馴染みのある単語となりました。この主要な原因として、大気中の二酸化炭素濃度上昇が有力候補となっています。このきっかけが、1975年にScience誌に発表されたBroecker教授による『Climate Change: Are we on the Brink of a Pronounced Global Warming?(気候変動：私達は現在、地球温暖化という確信にたる現象の瀬戸際にいるのか?)』

という論文です。実は、1945年から1977年頃までの期間に限定すると、気温はやや下りぎみの傾向を示し、カナダなど高緯度に位置する国では間氷期が終了し、寒冷化に入ったのではないかと危惧する研究者も現れた時期に、この論文は発表されました(https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/temp/an_wld.html)。その後、全球や北半球の平均気温は顕著な上昇トレンドを示しました。

以上のような数々の業績に対し、Broecker教授はトップレベルの賞を受賞されてきました。2006年にクラフォード賞を受賞されました。この賞は、スウェーデン王立科学アカデミーがノーベル賞の対象になっていない専門分野(地球科学、環境をとくに重視した生命科学など)が対象で、別名「地球科学分野のノーベル賞」と呼ばれているものです。この他にも1979年にアメリカ地球物理学連合の「Maurice W. Ewing Medal」、1986年に全米科学アカデミーのアレキザンダー・アガシー・メダル、1987年に国際地球化学会のヴィクトール・モーリッツ・ゴルトシュミット賞、1996年にはブループラネット賞およびクリントン大統領よりアメリカ国家科学賞などを受賞されています。

私は前述したようにBroecker教授の本を訳しましたが、この本の中で「私たちは絶えず懸命に仮説を立て、間違っても繰り返し、試行錯誤を繰り返しながら、正しい道筋を導きだす。これらの誤りは、より確かな結論へと向かわせる大事な手がかりとなるはずである。」と強調されていたのが印象的でした。Broecker教授から指導を受けた元学生に聞いた話では、Broecker教授は地球科学に興味を抱いた主婦の方を大学院に入学するように勧め、最終的に博士に育てあげたそうです。サイエンスはラテン語で「知識」という意味で、人々が疑問に思っていないことに対しあえて疑問を呈して、それを明らかにするのがサイエンスの基本です。この王道を全うされた稀有な先生がBroecker教授と言えます。謹んでご冥福をお祈りする次第です。



情報①

日本気象学会「気候形成・変動機構研究連絡会」の発足について

北海道大学 大学院地球環境科学研究院 谷本 陽一

気象や気候システムの理解、また、天気予報や気候の将来予測の向上にとって、海洋と大気を区別なく相互作用系として捉えるべきことに、おそらくほとんど異論はないと思います(岩崎 2018、日比谷 2018)。日本海洋学会としても気候学・気象学との連携は、1980年代のENSO研究の黎明期や、あるいはさらに遡り1970年代のAMTEX観測研究時代から継続的に行われてきたと思われる取り組みですが、やや意外なことに、海洋学と気候学・気象学を跨ぐ情報交換や議論の場として継続している「会」は、日本海洋学会の研究会としても日本気象学会または日本地理学会の研究連絡会としても存在していませんでした(1944年設立の海洋気象学会は残念ながら2016年に解散しました)。

日本気象学会にこの度新たに設立された標記の研究連絡会は、大気圏と大気圏以外のサブシステムとの相互作用が気候研究の要であるとし、日本海洋学会を始めとする気象の関連分野を主な活動の場

とする研究者同志の相互作用の推進、および、気候研究の将来を担う若手育成を奨励するために、以下の趣旨に基づき設立されました。

日本海洋学会会員の皆様におかれましては、これまで草の根レベルから研究プロジェクトレベルでご尽力くださいました気候学・気象学との連携が数多くあり、多くは現在も進行中だと思います。それらの連携活動を研究の世界に入る前の若い世代や、さらには多くの研究分野や社会にも明確に目に見える形で発信できるように、当研究連絡会の積極的なご活用をお願いする次第です。

当研究連絡会が開催する研究会には、海洋学会の会員の皆様も是非お越しください。開催案内や参加方法については、以下をご参照ください。

公益社団法人 日本気象学会 気候形成・変動機構 研究連絡会 ウェブサイト

<http://www.geoenv.tsukuba.ac.jp/~iccv/index.html>

設立趣旨

日本気象学会「気候形成・変動機構研究連絡会」は、過去・現在・未来の気候に関する研究者が、対象とする時代や領域に関わらず、一同に介することにより、気候諸現象の形成を軸として気候の形成過程に内在する物理過程について情報交換できる場を創出することを目指しています。ここで言う気候諸現象とは、日本の気候に密接に関係する現象を指します(例：梅雨前線、太平洋高気圧、チベット高気圧、ITCZ、ENSO、アジアモンスーン、オホーツク海高気圧、台風、秋雨前線、シベリア高気圧、アリューシャン低気圧、海氷、積雪や凍土、日本周辺の海域の海流や海水温度等々)。

気候変動研究の根幹である気候諸現象の発現・変動機構を、最新の知見を援用し、今日的な気候科学のフレームワークの中で整理・統合することは、喫緊の課題である自然災害のリスク管理に科学的根拠を与えることが期待されます。現在の気候諸現象の研究は、熱帯、中緯度、極域、メソ、季節予報、温暖化予測、古気候プロキシといったように、個々の専門分野の中で、急速な発展を遂げています。そこで、本研究連絡会は、気候変動・変化研究の基盤である気候形成に着目し、様々な時代や地域における素過程について、専門分野の垣根を超えて、議論・整理するプラットフォームとして機能することを目指します。

気候研究は本質的に大気以外のサブシステムとの相互作用の研究

が重要であります。特に海洋圏、陸圏、生態圏、そして人間圏をも含む「系」として捉えることが必要です。本研究連絡会においても関連分野との積極的な交流を推進します。日本気象学会員以外の関連分野(日本海洋学会、日本雪氷学会、日本地理学会等)からの参加、または共催などを歓迎し、日本地球惑星科学連合の大気水圏科学セクションにおいて、関連学協会とのリエゾンとしての機能を本研究連絡会が担っていく所存です。

代表：植田 宏昭(筑波大学)

副代表：谷本 陽一(北海道大学)、立花 義裕(三重大学)

事務局：遠藤 洋和(気象研)

世話人：今田 由紀子(気象研)、榎本 剛(京都大学)、

梶川 義幸(理化学研究所)、川村 隆一(九州大学)、

小坂 優(東京大学)、高谷 康太郎(京都産業大学)、

野沢 徹(岡山大学)、藤波 初木(名古屋大学)、

本田 明治(新潟大学)、前田 修平(気象研)、

松本 淳(首都大学東京)

参考文献：

岩崎 俊樹、2018: 日本気象学会の活動紹介、JOS News Letter, Vol.8, No.3, 6-7.

日比谷紀之、2018: 日本海洋学会の活動紹介、天気、Vol.65, 714-715.



情報②

「海洋学関連行事カレンダー」

JOSNL 編集委員 根田 昌典

PICES 2019 Annual Meeting

日程：2019年10月16日(水)–27日(日)

会場：Victoria Conference Centre, (Victoria, CA)

ウェブサイト：<https://meetings.pices.int/meetings/annual/2019/PICES/scope>

7th Euro-Argo Science Meeting

日程：2019年10月22日(火)–23日(水)

会場：Divani Palace Acropolis Hotel (Athens, Greece)

ウェブサイト：<https://www.euro-argo.eu/News-Meetings/Meetings/Euro-Argo-Users-Meetings/7th-Euro-Argo-Science-Meeting>

OCEANS 2019

日程：2019年10月27日(日)–31日(木)

会場：Washington State Convention Center (Seattle, Washington, USA)

ウェブサイト：<https://seattle19.oceansconference.org/>

気象学会 2019 年度 秋季大会

日程：2019年10月28日(月)–31日(木)

会場：福岡国際会議場(福岡県福岡市博多区)

ウェブサイト：<https://www.metsoc.jp/meetings/2019a>

2019 年度 水産海洋学会研究発表大会

日程：2019年11月8日(金)–10日(日)

会場：東北大学農学部青葉山コモンズ(宮城県仙台市青葉区)

ウェブサイト：<https://sites.google.com/view/suisankaiyou2019>

第33回 数値流体力学シンポジウム

日程：2019年11月27日(水)–29日(金)

会場：北海道大学フロンティア応用科学研究棟、工学部 A 棟

(北海道札幌市北区)

ウェブサイト：<http://www2.nagare.or.jp/cfd/cfd33/>

日本リモートセンシング学会 第67回 学術講演会

日程：2019年11月28日(水)–29日(木)

会場：岐阜県商工会議所(岐阜県岐阜市)

ウェブサイト：<https://www.rssj.or.jp>

AGU Fall Meeting

日程：2019年12月9日(月)–13日(金)

会場：Moscone Convention Center(San Francisco, California, USA)

ウェブサイト：<https://www2.agu.org/fall-meeting>

100th AMS Annual Meeting

日程：2020年1月12日(日)–16日(木)

会場：Boston Convention and Exhibition Center (Boston, Massachusetts, USA)

ウェブサイト：<https://annual.ametsoc.org/2020/>

Ocean Sciences Meeting

日程：2020年2月16日(日)–21日(金)

会場：San Diego, California, USA

ウェブサイト：<https://www2.agu.org/ocean-sciences-meeting/>

Joint ECSA 58-EMECS 13 Conference

日程：2020年9月7日(月)–10日(木)

会場：Hull, UK

ウェブサイト：<https://ecsa.international/event/2020/joint-ecsa-58-emeecs-13-conference-hull-september-2020>



情報③

Oceanography in Japan「海の研究」目次

28巻3号(2019年6月)

<原著論文>

多様な湿潤密度を有する礫質土砂環境の硬度評価の研究

梶原 直人・佐々 真志 41-50
doi:10.5928/kaiyou.28.3_41



情報④

Journal of Oceanography 目次

Journal of Oceanography

Volume 75 · Number 3 · June 2019

ORIGINAL ARTICLES

Dependence of wind stress across an air-sea interface on wave states

D. Zhao · M. Li 207

Characteristics of tide-surge interaction and its roles in the distribution of surge residuals along the coast of China

J. Feng · W. Jiang · D. Li · Q. Liu · H. Wang · K. Liu 225

Interannual wave height variability in the Yellow Sea

F. Zhai · P. Li · D. Song 235

Biological modulation in the seasonal variation of dissolved oxygen concentration in the upper Japan Sea

H. Kim · K. Takayama · N. Hirose · G. Onitsuka
T. Yoshida · T. Yanagi 257

Amended larval recruitment model for the Japanese spiny lobster *Panulirus japonicus* based on new larval records and population genetic data in Taiwan

T. -Y. Chan · C. -H. Yang · K. Wakabayashi 273

Frontolysis by surface heat flux in the eastern Japan Sea: importance of mixed layer depth

S. Ohishi · H. Aiki · T. Tozuka · M.F. Cronin 283



書評

「深海—極限の世界」 生命と地球の謎に迫る

藤倉 克則・木村 純一 編者／海洋研究開発機構 協力
講談社 2019年5月発行

新書判 296頁 本体 1,100円 ISBN-978-4065160428

評者：東京大学大学院新領域創成科学研究科／大気海洋研究所 小島 茂明

一昨年の夏、国立科学博物館で開催された特別展「深海 2017～最新研究でせまる“生命”と“地球”～」の混雑ぶりは、まだ記憶に新しい。定番の恐竜を凌ぐ記録的なヒットであったと聞く。本書はその内容をさらに発展させて、一般向けに解説したものである。第1章「深海と生命」では、化学合成生態系における細胞内共生を中心に、世界をリードする最新の研究成果がわかりやすくまとめられており、この部分だけでも購入する価値がある(授業の参考書としても)。第2章「深海と地震」では、巨大地震の発生源としての深海研究の歴史と現状がまとめられている。特に、東北地方太平洋沖地震後の「ちきゅう」による掘削調査の部分には、時間や海況と闘いながら、「前代未聞のオペレーション」がいかに成し遂げられたのかが臨場感豊かに描かれており、本書随一の読みどころかもしれない。第3章「人類と深海」には、深海が人類にもたらす恵み

(最近サービスと言わずに、こう言うのが推奨されているらしい)と人類が深海に及ぼす影響がまとめられている。序章に、あえて「深海と人類」でなく「人類と深海」にしたと書かれている様に、人類の未来は最早、深海なしでは考えられない時代になっているとも言える。逆に深海環境の行く先も人類次第であり、沖合漁業、海底資源開発、海洋酸性化、マイクロプラスチック等々、解決すべき課題が山積している。深海研究もかつての純粋な基礎科学から、役立つ研究へと舵を切らざるを得ないのだろうか。当ニュースレター読者の多数を占めるであろう研究機関のスタッフには、研究費獲得という言葉が頭をよぎるかもしれない。しかしながら、私達が学生時代に深海研究を志したのは、未知へのあこがれ故ではなかったのだろうか。博物学の時代を経て、近代的な深海研究の誕生と躍進の原動力となってきた知的好奇心も失いたくはないものである。

MXシリーズ水温データロガー

NEW



無線通信型



MX2201



MX2203

仕様	HOBOペンダントMX		HOBOティドビットMX	
モデル	MX2201	MX2202	MX2203	MX2204
計測対象	温度	温度・照度	温度	温度
耐圧(水深)	30m		120m	1,500m
計測範囲(温度)	※-20~50°C(水中), -20~70°C(空气中)		※-20~50°C(水中), -20~70°C(空气中)	
(照度)	—	0~167,000 lux	—	—
メモリー容量	96,000サンプル			
バッテリー	CR2032(交換可)		CR2477(交換可)	CR2477(交換不可)
計測間隔設定	1秒~18時間			
通信方式	BLE(Bluetooth Low Energy) 見越し30m			
寸法(mm)	34×56×16		45×73×36	41×70×35
質量(g)	13		36	33

※バッテリー性能を維持するためには、水中での連続使用温度は30°Cが限度となります。

電気伝導率(塩分)

水位ロガー



電気伝導率(塩分)ロガー



MX2001シリーズ



U20シリーズ

仕様	電気伝導率ロガー	4m,9m,30m,76mモデル	
モデル	U24-001		
計測範囲(校正) - 導電率	① 0~1,000 μ S/cm ② 0~10,000 μ S/cm	◎ワイヤレス通信 (iOS, アンドロイド端末)	◎絶対圧測定式
〃 (〃) - 温度	5~35°C	◎気圧補正センサー別置	◎気圧補正センサー別置
精度(校正範囲内) - 導電率	読値の3% 又は5 μ S/cm(大きい方)	◎標準ステンレスハウジング	◎標準ステンレスハウジング
〃 (校正範囲内) - 温度	0.1°C	◎海水対応チタンハウジング	◎海水対応チタンハウジング
記録容量(導電率+温度セット)	1範囲指定:18,500 2範囲指定:11,800	◎水位単位直読式	◎廉価版ポリプロピレンハウジング
最大使用深度/動作温度	70m/0~50°C	◎ユーザー交換可能バッテリー	◎専用バッテリー内蔵
寸法/重量	3.18cm ϕ ×16.5cm長/193g	◎30,000サンプルメモリー	◎21,700サンプルメモリー
内蔵バッテリー/寿命	3.6V リチウム/3年		

姉妹品：気温、湿度、照度、電圧、電流、光量子、日射、風向、風速、土壌水分、気圧、CO₂、その他

製造者 米国オンセット コンピューター社

総代理店 **パシコ貿易株式会社**

〒113-0021 東京都文京区本駒込6丁目1番21号コロナ社第3ビル

TEL:03-3946-5621(代) FAX:03-3946-5628

URL:<http://www.pacico.co.jp> E-mail:sales@pacico.co.jp



学会記事 ①

2019年度 日本海洋学会春季大会 報告

大会実行委員会 委員長 川合 義美

大会日程：2019年5月26日(日)ー5月30日(木)
 大会会場：幕張メッセ国際会議場・東京ベイ幕張ホール
 大会実行委員会 委員長：川合 義美
 (国立研究開発法人海洋研究開発機構)

1. 春季大会と実行委員会の概要

2019年度日本海洋学会春季大会は、昨年に続いて、日本地球惑星科学連合(JpGU)の大会に合流する形で行われました。日本海洋学会の2019年度春季大会実行委員会は、JpGU 担当幹事、集会担当幹事、及び研究発表担当幹事を含む幹事5名で構成されました。

2. セッション・講演数

JpGU 全体の全参加者は8,390名、セッション数は240件、講演件数は5,028件で、昨年よりやや多くなりました。海洋学会の学協会セッション(共催セッション)は28件、これらのセッションへの要旨投稿数は合計578件となり、2016年度までの春季大会の要旨投稿数400件前後と比べると投稿数は大きく増加しています(但し海洋以外の分野の投稿も含んでいます)。また、学協会セッション以外にも、海洋が関係するセッションは大会全体で15件程度ありました。

3. 学会の会合

総会、評議員会、各種委員会も、JpGU 大会時に幕張メッセ国際会議場の会議室で行われました。会議室の使用は有料であるため、経費節約のため複数の委員会を同じ部屋で同時に開催しました。(JpGU 大会に参加登録していない方は「会合名札」を受付で受け取ることで、参加費を払うことなく会合のみ出席することが可能です。)

日時	会合名
5月26日 12:30-13:30	三賞選考委員会
〃 12:30-13:30	論文賞選考委員会
〃 12:30-13:30	環境科学賞選考委員会
〃 12:30-13:30	Journal of Oceanography 編集委員会
〃 12:30-13:30	海の研究編集委員会
〃 12:30-13:30	沿岸海洋研究会委員会
〃 12:30-15:15	ブレイクスルー研究会
〃 17:15-18:15	沿岸海洋研究会事業部会
〃 18:15-20:30	春季評議員会
5月27日 12:30-13:30	教育問題研究会
〃 17:00-18:00	海洋環境問題研究会
〃 18:30-20:30	日本海洋学会 総会

4. フェロー・西田賞の表彰

第3回「地球惑星科学振興西田賞」に選ばれた東塚 知己会員が、他分野の受賞者9名とともに5月28日18:30から開催された表彰式で表彰を受けました。おめでとうございます。

第3回「地球惑星科学振興西田賞」東塚 知己会員

授賞理由：熱力学的な視点に基づく中低緯度の気象海洋相互作用に関する研究



5. 展示

大会では、民間企業や大学、研究機関による一般展示ブース(69ブース)、書籍出版・関連商品の展示ブース(25ブース)、大学の紹介パネル(12ブース)、パンフレットスタンド(1ブース)、学協会デスク(14ブース)、special exhibition(7ブース)、及び特別カウンター展示(5ブース)が設けられ、様々な分野の多彩な展示が催されました。NASA と JAXA は共同で大画面による衛星観測による最新の研究成果を紹介する「ハイパーウォール展示」を毎年開催しています。

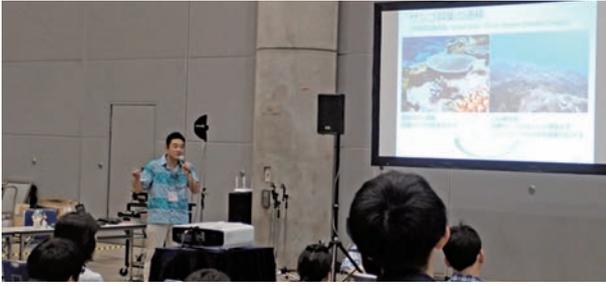
海洋学会も広報委員会のメンバーが中心となって、例年通り、国際会議場1階のフロアの学協会デスクで学会を紹介する展示を行いました。デスクには入会案内、パンフレット、会場案内図、セッション・会合一覧表、書籍などが置かれました。学会員以外の参加者も多数、海洋学会のデスクに立ち寄って頂けました。



6. イベント

展示の他にも、JpGU 主催で様々なイベントが催されました。昼休みに開催されるランチタイムスペシャルレクチャーでは、各セッションから講師をお招きして最新の研究などを学生や専門外の方にもわかりやすく講演して頂きました。5月26日には大気水圏科学セッションとして須賀 利雄会員をお招きして、「全球海洋観測システムとアルゴ計画」をご講演頂きました。他にも、表彰式、懇親会、International Mixer Luncheon、学生と若手研究者が語り合う「おしゃべり広(Bar)場」、ショートセミナー、進路・キャリアパス相談など、多くのイベント・企画がありました。5月29日の19:00からはJpGU フットサル大会「GEOFUT 19」が開催されました。

海洋学の魅力を大会参加者に広く伝えるため、大会1日目から3日目にかけてポスター会場にて、海の出前授業に登録されている講師の中から3名の方にショートセミナー(各回20分)を行っていただきました。5月26日は藤井 賢彦会員「海洋酸性化って何?海の生物は?私たちの暮らしは?」、5月27日は石坂 丞二会員「宇宙から海のプランクトンを観る」、5月28日は杉本 周作会員「黒潮~渦に満ちた最強海流の不思議~」と、海洋物理、生物、化学の



各分野における最先端の海洋研究を分かりやすく紹介していただきました。どのセミナーも20名を超える参加者があり、セミナーの後も参加者から質問があるなど、海洋学をより身近に感じ、興味を持っていただけたのではないかと思います。来年度もショートセミナーを通して、JpGUにおける海洋学の普及活動を続けていきたいと考えております。

7. 本大会を振り返って

JpGU大会に合流して3回目の春季大会となり、海洋学会の皆様もだいぶ慣れてきたのではないかと思います。JpGU大会全体の参加者・講演数・セッション数は昨年より微増というところで、高値で安定してきた感があります(気のせい、展示会場やポスター会場が少し寂しかったような気がします)。今回も多く学会員にご参加いただき、海洋関係のセッションも多数生まれ、盛況な大会となりました。なお、今回も一部のセッションで投稿数がやや伸び悩んだため、口頭コマ数を確保するために、一部の投稿者の方にセッションの移動をお願いすることになりました。お手数をおかけしたことをお詫びするとともに、ご協力に感謝いたします。

大会2日目の5月27日に、ユニオンセッションとして「地球惑星科学の進むべき道9：大型研究計画とマスタープラン2020」が開催されました。本セッションは地球惑星科学系の情報共有や合意形成を目的として、日本学術会議地球惑星科学委員会とJpGUの共催でマスタープラン2020の公開ヒアリングとして実施されました。日本海洋学会からの提案課題「深海アルゴフロートの全球展開による気候・生態系変動予測の高精度化」について、前会長の日比谷 紀之会員から紹介がありました。本セッションでは一般参加者も評価に加わることとなり(一定件数以上評価できる場合のみ)、大変熱のこもった議論が交わされました。ただ、セッション開始時まで一般の参加者には評価方法や評価に加わることが伝えられていなかったことには疑問が残りました。また、同様にユニオンセッションとして5月30日午前には「100周年を迎えるIUGGへの日本の貢献」が開催され、IAPSOへの日本の貢献について升本 順夫会員が講演されました。

JpGU大会では学生を対象として学生優秀発表賞を設けており、優秀な発表を表彰しています(口頭、ポスターとも対象)。今年は海洋学会のメーリングリストで審査の呼びかけを行ったこともあり、学生優秀発表賞の審査員の集まりは比較的良かったように思います。審査にご協力頂いた皆様には厚く御礼申し上げます。例年、気象・海洋系に比べて水文系の発表の審査員がなかなか集まらず困っております。異なる分野の審査にもご協力頂けると大変助かります。また、日曜日には高校生によるポスターセッションが開催され、今年は80件の発表がありました。高校生セッションも全体的にレベルが高く、活気のあるセッションとなりました。高校生セッションも学生優秀発表賞のどちらも、大会参加者であればどなたも審査員になれますので(学生を除く)、ぜひ来年以降も将来を担う高校生や学生の発表に関心を持っていただき審査にもご協力頂けるようお願いいたします。

また、本大会からの大きな変更点として、

- ・70歳以上の正会員の参加登録費が大学院生と同じになった(以

前は無料)

- ・会場の受付に「参加登録窓口」を設けないことになったことが挙げられます。参加登録をした際に受け取るeチケット(バーコード)を会場で提示できない場合、「eチケット発行代行サービス」が必要となり、参加登録料とは別に代行事務手数料(5,000円)を支払わなければなりません。事前に参加登録をしていない場合でも、会場に来て自分でPCやスマホで会員ページにログインしてクレジットカードで参加登録料を支払ってeチケットを入手できれば、代行事務手数料は必要ありません。要は自力でPCやスマホで会員ページにログインできれば問題ありません(会場の無料WiFiでクレジットカード情報を入力するのは控えましょう)。これは個人情報保護の法律改正への対応とセキュリティ強化のため、カード情報の非保持化に対応できる専用の入力端末以外でクレジットカード情報を処理したり、会員情報の閲覧権限を持つスタッフ以外の方が会員情報を閲覧することができなくなったためです。「eチケットを持っておらずかつ自力で会員ページにログインすることができない」方に対応するために人件費も発生するため、受益者負担の原則によりこのようになります。ご面倒をおかけしますが、ご理解・ご協力のほど、お願いいたします。

来年度2019年度大会は再びAGUとのジョイントミーティング(JpGU-AGU Joint Meeting 2020)となり、海外からの参加者が大幅に増えると予想されます。JpGUではセッションの英語化についての議論が長年続いており、来年度はジョイントミーティングであることから、セッションは極力英語で行うことが求められるかと思えます。国際化を強く推進すべきという主張と同時に、母語で学術を行うことの重要性を訴える意見もあり、なかなか決着は付かないようですが、少なくとも来年度に関しては「お試し」のつもりで英語でセッションを行うことをご検討頂ければと思います。また、類似したセッションが多すぎる、同時並行で行われている、マージできないのか、といったご意見を毎年頂いております。これまではコンピナーのご意向を尊重して基本的にマージのお願いは控えてきましたが、プログラム編成がかなり厳しくなってきましたので、今後はセッションの内容が近い場合は統合をお願いすることになるかもしれません。

広報委員会の皆様には、学協会デスクの設置やショートセミナーの企画・実施をして頂きました。学協会デスクは海洋学会だけテーブルを2つ使い、展示物も他の学協会よりかなり充実していたと思います。昨年からはスタンプラリーやショートセミナーにも参入し、5月26日、27日、28日にそれぞれ1回ずつの計3回のショートセミナーを行って頂きました。広報委員会の皆様、ショートセミナーの講師の方、広報のお手伝いをして頂いた方、どうもありがとうございました。また何かいいアイデアがありましたら幹事会や広報委員会までご一報頂ければと思います。

最後になりましたが、日本海洋学会春季大会が円滑に合同大会に合流できたのは、学会員皆様のご協力とともに、JpGU事務局の方々のご助力によるところも大きく、ここに厚く御礼申し上げます。

8. 来年度以降の日程

2020年度日本海洋学会春季大会も、JpGU大会にて開催されます。2020年度のJpGU大会は、再びAGUとのジョイントミーティングとなります。会場は幕張メッセ国際会議場及び東京ベイ幕張ホール、日程は5月24日(日)から28日(木)の予定です。今年は9月2日(日)からセッション提案がはじまっています。詳細が決まり次第、会員の皆様にご連絡いたします。2020年度大会も積極的なセッション提案をお待ちしております。

なお、再来年2021年度のJpGU大会は、5月30日(日)から6月3日(木)の日程で、横浜市のパシフィコ横浜ノースで開催される予定です。



学会記事 ②

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者の推薦依頼

2020年度日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会 委員長 永田 俊

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会(以下受賞候補者選考委員会という)では、これら三賞の2020年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。下記参考資料をご参照の上、推薦要領に従って、これら三賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。なお、宇田賞には、研究グループとしての学術業績ばかりでなく、教育・啓発や研究支援などで海洋学の発展に貢献のあった会員を広くご推薦ください。

各賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目1～6について、A4判用紙1枚に記入し郵送してください。推薦用紙は日本海洋学会のホームページからもダウンロードできます。

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/archives/jos_announce/7031

1. 候補者の氏名と所属機関

(岡田賞の場合は、生年月日も記入してください)

2. 受賞の対象となる研究課題

(宇田賞の場合は、受賞の対象となる学術、教育、あるいは啓発に関する業績)

3. 推薦理由

4. 推薦の対象となる主要論文

(宇田賞の場合は省略可)

5. 推薦者の氏名、印および所属機関

6. 推薦日付

なお、審査の際の参考とするため、学会賞、岡田賞の受賞候補者に関しては、各候補者の略歴と業績リストを、宇田賞については推薦対象課題に関する資料もあわせてお送り頂きますようお願いいたします。またいずれの推薦についても、紙の推薦用紙と資料の送付に加えて、それらの情報を編集可能なマイクロソフト・ワードの電子ファイルとして、以下のメールアドレスに添付ファイルとして、お送りいただきますようお願い致します。ワードファイルには印影は不要です。

締切日：2019年9月3日(火) 必着

送付先：〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル9階

(株)毎日学術フォーラム内

日本海洋学会 賞候補者選考委員会 jos@mynavi.jp

<参考資料>

日本海洋学会学会賞・岡田賞・宇田賞細則(抄)

第1条 日本海洋学会賞(以下学会賞という)、日本海洋学会岡田賞(以下岡田賞という)および日本海洋学会宇田賞(以下宇田賞という)を本学会に設ける。学会賞は本学会員の中で海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、岡田賞は受賞の年度の初めに36歳未満の本学会員で、海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、宇田賞は顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓発や研究支援において功績のあった者など、海洋学の発展に大きく貢献した本学会員の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。(以下省略)



学会記事 ③

日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者の推薦依頼

2020年度 日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会 委員長 福田 秀樹

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、日本海洋学会環境科学賞受賞候補者選考委員会(以下、賞候補者選考委員会という)では、2020年度環境科学賞の受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けます。環境科学賞の制定の経緯、目的等に関しましては、学会HPに掲載の日本海洋学会環境科学賞「設立趣旨」(http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards)、または「海の研究」第18巻第3号(2009年)、ならびに下記の参考資料(会則)をご参照下さい。

なお、受賞候補者の選考は、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておま

す。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦下さいますようお願い申し上げます。加えて、多数の候補者が推薦された場合は、若手研究者を優先いたしますが、本賞は、若手に限らず、海洋環境に関わる活動で高い評価を得ている研究者あるいは研究グループのリーダーを対象としますので、推薦要領に従って、本賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目について記入し、下記の送付先まで郵送またはメール

にてお送りください。

1. 候補者の氏名と所属機関・役職名 (生年月日もご記入ください)
2. 受賞の対象となる研究課題
3. 推薦理由
4. 推薦者の氏名、所属機関、メールアドレス
5. 推薦の対象となる主要論文 (省略可)
6. 推薦日付

締切日： 2019年9月13日(休)必着

送付先：＜郵送＞ 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1
パレスサイドビル9階
（毎）毎日学術フォーラム内
日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会
＜メール＞ 件名を「海洋環境科学賞受賞候補者の推薦」とし、下記宛に送信
jos@mynavi.jp

＜参考資料＞

日本海洋学会会則 第6章 表彰

第37条 5. 海洋環境保全に関わる学術研究の発展、啓発および教育に大きく貢献した会員を表彰するため、日本海洋学会環境科学賞を設ける。その規定は細則で定める。

現在までの受賞者

2010年度 清野 聡子 / 2011年度 梅澤 有 / 2012年度 速水 祐一 / 2013年度 栗原 晴子 / 2014年度 神田 穰太 / 2015年度 野村 英明 / 2016年度 藤井 直紀 / 2017年度 一見 和彦 / 2018年度 張 勁 / 2019年度 福田 秀樹

Announcement of nomination for the Environmental Science Prize of the Oceanographic Society of Japan

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is receiving nominations for the JOS Environmental Science Prize which will be awarded at the 2020 JOS spring meeting to recognize achievements in oceanographic research. Nominees and nominators must be members of JOS.

The JOS Environmental Science Prize is awarded to a member of the Society who has made outstanding contributions to the progress of oceanography and/or educational outreach in the identification, analysis and/or solution of marine environmental problems. The prize will be awarded up to 1 person annually.

Recommendations must be written in English or Japanese and should include the followings.

1. The nominee's full name, birth date and affiliation
2. Description of the nominee's achievements for the prize
3. List of nominee's key publications (if available)
4. The nominator's full name, affiliation and email address (signed and dated)

Please send the recommendation by mail or e-mail to Award Committee of JOS Environmental Science Prize Mainichi Academic Forum, Floor-9, Palace-side Building 1-1-1 Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo 100-0003, Japan jos@mynavi.jp [Subject: the Environmental Science Prize of JOS]

Deadline: September 13rd, 2019

The winners in the past

2010 Satoko Seino / 2011 Yu Umezawa / 2012 Yuichi Hayami / 2013 Haruko Kurihara / 2014 Jyota Kanda / 2015 Hideaki Nomura / 2016 Naoki Fujii / 2017 Kazuhiko Ichimi / 2018 Jing Zhang / 2019 Hideki Fukuda



学会記事 ④

2019年度 日本海洋学会 通常総会 議事録

日本海洋学会 幹事会

日時：2019年5月27日(月) 18:30 - 20:20
会場：幕張メッセ 国際会議場 103号室
出席者：出席42名、委任状162名、計204名

1. **開会**：開会に先立ち、北出集会担当幹事より、学会会則第4章第28条の規定による定足数に達しており、総会の成立要件を満たしている旨報告があった。
2. **議長選出**：張 勁会員を議長として選出した。
3. **会長挨拶**：神田会長
総会開催に先立って、神田会長より挨拶があった。堀部純男名誉会員、Walter H. Munk 博士、Wallace S. Broecker 博士がご逝去されたことが報告され、哀悼の意が示された。

東塚 知己会員が西田賞を受賞する件が報告された。川幡 穂高会員が文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を、鶴田 忠彦会員が文部科学大臣表彰科学技術賞(開発部門)を、白井 厚太朗会員が文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞した件が報告された。また、海洋立国推進功労者表彰を新野 宏会員、古谷 研会員、大島 慶一郎会員、白山 義久会員が受けた件が報告された。研究発表大会におけるセッション制や海洋生物学研究会など日比谷前会長が行った改革を着実に推進するとともに、必要な点について改善を行っていくことが述べられた。海洋分野での若手研究者の確保、海洋研究を実施する上でのインフラの確保、学会運営の安定化を柱として学会運営を行っていくことが述べられた。

4. 報告事項

- 1) **会務報告**：2018年度会員異動状況、Journal of Oceanography、海の研究、JOS ニュースレターの発行状況、2018年度大会の報告及び2019年度以降の大会の予告、2019年度各賞受賞候補者の選定結果、各賞候補者選考委員会委員の選挙結果、各委員会・支部・研究会の活動状況などについて報告があった。
- 2) **学界関連報告**：学界関連情報が紹介された。JpGU および水産・海洋科学研究連絡協議会、創設100周年を迎えるIUGGに関する報告がなされた。

5. 審議事項

- 1) **2018年度事業報告ならびに決算報告について**：配布資料に基づき説明があった後、原案が承認された。
- 2) **2018年度監査報告について**：2018年度の会計処理が適切に行われていたことを確認した旨報告があった。監査報告を踏まえ、2018年度事業報告、決算報告、監査報告が承認された。
- 3) **2019年度事業計画並びに予算案について**：配付資料に基づき説明があった後、原案が承認された。



学会記事 ⑤

2018年度 決算および2019年度 予算報告

日本海洋学会 幹事会会計担当 安田 珠幾

1. 2018年度決算における会費収入について

2018年度決算では決算額が予算額より約500万円少なくなった(決算報告参照)。これは、3月の会費収入の取り扱いが変わったために生じたものである。

2017年度より総会の時期が3月から5月に変更されたことに伴い、2016年度及び2017年度決算では、年度末の3月に納入された翌年度会費を当該年度の収入として取り扱った(表)ため、決算報告における会費収入が当該年度の会費収入の実態を表していなかった。そこで、年度末の3月に納入された翌年度会費は翌年度収入(前受金)として取り扱うこととし、2018年度決算より適用することとした(2018年度秋季評議員会)。

これにより、2018年度決算では、移行期間として、2018年3月及び2019年3月に納入された翌年度会費はどちらも2018年度決算の会費収入には含まれなかった(それぞれ2017年度、2019年度に含まれる)ため、2018年度会費収入の決算額は予算額より少なくなった。なお、このような齟齬は2019年度以降には生じず、決算報告における会費収入が当該年度の会費収入の実態を表すようになる。

表：当該年度の会費収入として取り扱う期間の変化

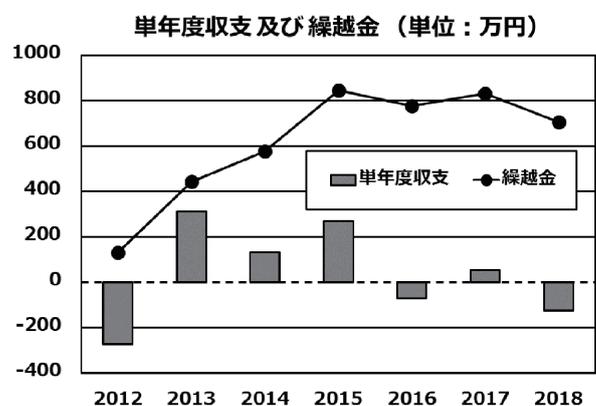
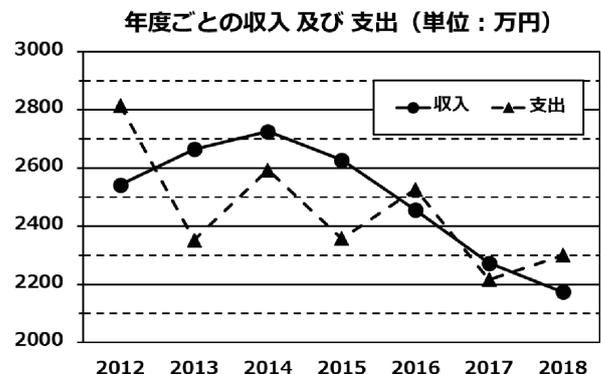
年度	総会の時期	当該年度の会費収入として取り扱う期間
2015年度	2016年3月	2015年3月～2016年2月
2016年度	翌年度5月	2016年3月～2017年3月 ・2017年度会費も含む
2017年度		2017年4月～2018年3月 ・2018年度会費も含む
2018年度		2018年4月～2019年3月 ・2019年度会費は2019年度の収入→前受金
2019年度		2019年4月～2020年3月 ・2018年度の前受金は2019年度の収入 ・2020年度会費は2020年度の収入→前受金

2. 2018年度の次期繰越金について

2018年度決算では、次期繰越金が前期繰越金より約760万円減少した(決算報告参照)。これは、会費収入として取り扱う期間が年度毎に異なった(表)ため、2017年度の会費収入が多かったことが主な原因である。

このように、会費収入として取り扱う期間の違いにより、2016

年度以降の決算では、年度毎の収支の実態がわかりにくい状態となっていた。そこで、新しい決算方法(年度末の3月に納入された翌年度会費は翌年度収入として取り扱う)を2018年度以前にも適用して収支を再計算した(図)。図は年度毎の収支の実態を示すものであり、2015年度以降、繰越金が700～800万円台で維持されていることがわかる。



図：新しい決算方法を2018年度以前に適用した場合の決算(上) 単年度収入及び支出、(下) 単年度収支と繰越金。

日本海洋学会 2018年度 決算報告

(2018年4月1日～2019年3月31日)

収入の部

単位：円

科目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B)-(A)	摘要
1. 会費収入		15,056,200	10,013,000	-5,043,200	
2018年4月～2019年3月	通常会員会費	11,939,400	6,985,000	-4,954,400	635人
(注) 2018年度における 会費収入参照	通常会員会費(シニア)	633,600	272,000	-361,600	34人
	学生会員会費	475,200	696,000	220,800	116人
	賛助会員会費	760,000	560,000	-200,000	14人
	団体会員会費	1,248,000	1,200,000	-48,000	50人
	終身会員会費	0	300,000	300,000	6人
2. 事業収入		2,615,500	2,175,000	-440,500	
	広告収入	519,000	319,000	-200,000	NL掲載広告2件、名簿広告2件
	会誌売上収入	772,000	708,000	-64,000	
	刊行物売上収入	24,500	28,000	3,500	秋季8冊
	JO掲載料	1,300,000	1,120,000	-180,000	29件
3. 積立金		823,000	122,734	-700,266	
	環境科学研究助成	823,000	122,734	-700,266	宇野木基金より
4. 雑収入		1,003,000	982,492	-20,508	
	受入利息	3,000	4,291	1,291	
	著作権料	1,000,000	948,201	-51,799	springer印税66万、JST10万、JAC17.5万
	その他	0	30,000	30,000	若手助成残金戻り1件
5. 寄附金		300,000	2,139,283	1,839,283	
	日本海洋科学振興財団	200,000	200,000	0	
	海口マン21	100,000	100,000	0	
	大会開催戻り金	0	1,839,283	1,839,283	2018年秋季1,693,846円、2017年秋季145,437円
6. 学会基本金から 一時繰入		0	0	0	
小計		19,797,700	15,432,509	-4,365,191	
前期繰越金		14,644,008	14,644,008	0	
合計		34,441,708	30,076,517	-4,365,191	

(注) 2018年度決算における会費収入：年度末の3月に納入された翌年度会費について、2016年度及び2017年度決算では当該年度の収入として取り扱ってきたが、2018年度決算より翌年度収入(前受金)として取り扱うこととした(2018年度秋季評議員会)。したがって、2018年3月及び2019年3月に納入された翌年度会費はどちらも2018年度決算の会費収入には含まれないため、2018年度会費収入の決算額は予算額より少なくなっている(上述参照)。

支出の部

単位：円

科目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B)-(A)	摘要
1. 管理費		9,600,000	9,177,263	-422,737	
	業務委託費	7,340,000	7,245,050	-94,950	2018年3月～2019年2月
	会議費	450,000	462,457	12,457	
	旅費交通費	600,000	283,637	-316,363	
	通信運搬費	400,000	356,402	-43,598	
	消耗品費	460,000	460,128	128	コピー代等
	雑費	350,000	369,589	19,589	
2. 事業費		14,678,000	13,823,606	-854,394	
	大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	
	海洋環境問題研究会	100,000	100,000	0	
	海洋生物学研究会	100,000	100,000	0	
	教育問題研究会	100,000	100,000	0	
	女子中高生夏の学校経費	50,000	25,605	-24,395	
	JO発行経費	6,386,000	6,305,244	-80,756	Vol.74:5冊、Vol.75制作費、編集委員会費含む
	海の研究発行経費	1,400,000	1,366,508	-33,492	6回分、編集委員会費含む
	J-STAGE公開経費	100,000	73,222	-26,778	
	JOSニュースレター発行経費	1,480,000	1,491,288	11,288	4回分
	広報委員会	150,000	150,000	0	
	会誌送料	800,000	747,968	-52,032	
	会員名簿発行費	832,000	842,090	10,090	会員名簿制作費
	送金手数料費	70,000	68,850	-1,150	
	学会賞金	800,000	800,000	0	
	メダル製作費	10,000	7,765	-2,235	名前印字
	若手集会助成金	300,000	300,000	0	2件
	若手研究者海外渡航援助	300,000	235,066	-64,934	2名
	青い海助成事業	600,000	10,000	-590,000	1件
	日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
	地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
	防災学術連携体会費	30,000	30,000	0	
	男女共同学協会連絡会分担金	10,000	10,000	0	
小計		24,278,000	23,000,869	-1,277,131	
3. 予備費		10,163,708	0	-10,163,708	
次期繰越金		0	7,075,648	7,075,648	
合計		34,441,708	30,076,517	-4,365,191	

日本海洋学会 2019年度 予算

(2019年4月1日～2020年3月31日)

一般会計

収入の部

単位：円

科 目	2018年度 予算額(A)	2019年度 予算額(B)	差引増減額 (B)-(A)	備 考
1. 会費収入	15,056,200	15,954,000	897,800	
通常会員会費	11,939,400	12,738,000	798,600	年会費 11,000 会員 1,158名 納入率 100%
通常会員会費(シニア)	633,600	576,000	-57,600	年会費 8,000 会員 72名 納入率 100%
学生会員会費	475,200	360,000	-115,200	年会費 6,000 会員 60名 納入率 100%
賛助会員会費	760,000	720,000	-40,000	年会費 40,000 会員 18名 納入率 100%
団体会員会費	1,248,000	1,560,000	312,000	年会費 24,000 会員 65名 納入率 100% (JO購読団体からの契約変更予定団体15名を含む)
2. 事業収入	2,615,500	1,484,000	-1,131,500	
広告収入	519,000	219,000	-300,000	NL4回：2社
会誌売上収入	772,000	117,000	-655,000	海の研究 9,000×13 = 117,000
刊行物売上収入	24,500	28,000	3,500	要旨集 3,500×8 = 28,000
JO掲載料	1,300,000	1,120,000	-180,000	
3. 積立金	823,000	823,000	0	
環境科学研究助成	823,000	823,000	0	積立金より(助成金3件60万、環境科学賞副賞10万、委員会費含む)
4. 雑収入	1,003,000	803,000	-200,000	
受入利息	3,000	3,000	0	学会基本金等利息
著作権料	1,000,000	800,000	-200,000	
5. 寄付金	300,000	300,000	0	
寄付金	300,000	300,000	0	海口マン21 100,000 日本海洋科学振興財団 200,000
小 計	19,797,700	19,364,000	-433,700	
6. 前期繰越金	14,644,008	7,075,648	-7,568,360	
合 計	34,441,708	26,439,648	-8,002,060	

支出の部

単位：円

科 目	2018年度 予算額(A)	2019年度 予算額(B)	差引増減額 (B)-(A)	備 考
1. 管理費	9,600,000	9,608,000	8,000	
業務委託費	7,340,000	7,278,000	-62,000	
会議費	450,000	460,000	10,000	評議員会、賞委員会他
旅費交通費	600,000	600,000	0	諸会合旅費
通信運搬費	400,000	360,000	-40,000	通常郵便料、ML維持費
消耗品費	460,000	470,000	10,000	コピー、封筒他
雑費	350,000	440,000	90,000	会費およびJO掲載料クレジットカード入金手数料等
2. 事業費	14,678,000	9,555,000	-5,123,000	
大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	2019年度秋開催
海洋環境問題研究会	100,000	100,000	0	
教育問題研究会	100,000	100,000	0	
海洋生物学研究会	100,000	100,000	0	
女子中高生夏の学校経費	50,000	50,000	0	
ポスターデザイン費用	0	100,000	100,000	一家に1枚ポスターWeb版デザイン
JO発行経費	6,386,000	1,500,000	-4,886,000	発行費6冊分、冊子体130部購入費
海の研究発行経費	1,400,000	1,400,000	0	
J-STAGE公開経費	100,000	175,000	75,000	海の研究
JOSニュースレター発行経費	1,480,000	1,480,000	0	4回分
海洋観測ガイドライン英文経費	0	200,000	200,000	
ISBNコード取得経費	0	40,000	40,000	海洋観測ガイドライン改訂版用
広報委員会	150,000	150,000	0	
会誌送料	800,000	750,000	-50,000	団体・賛助等年6回、会員NL発送年4回
会員名簿発行費	832,000	125,000	-707,000	異動者リスト制作費
送金手数料費	70,000	70,000	0	
学会賞金	800,000	900,000	100,000	
メダル製作費	10,000	10,000	0	受賞者名刻印
若手集会助成金	300,000	300,000	0	
若手研究者海外渡航援助	300,000	300,000	0	
青い海助成事業	600,000	600,000	0	3件
日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
防災学術連携体年会費	30,000	30,000	0	
男女共同学協会連絡会分担金	10,000	15,000	5,000	
小 計	24,278,000	19,163,000	-5,115,000	
3. 予備費	10,163,708	7,276,648	-2,887,060	
合 計	34,441,708	26,439,648	-8,002,060	

水を見つめて — T.S.K Since 1928

当社は、水を測る機器の専門メーカーとして、この道一筋に今日に至っています。

現在では、過酷な海洋環境に耐え得るノウハウが、ダム、河川に至る水質測定器の開発に寄与しています。



卓上型塩分計



海洋自動観測システム

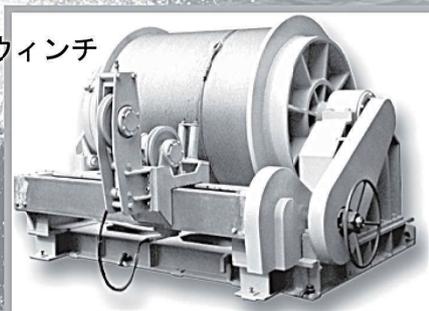


水質総合監視装置

expendable水温／塩分計



海洋観測用ウィンチ



白河工場

本社・横浜工場



T.S.K

株式会社 鶴見精機

<http://www.tsk-jp.com/>
sales@tsk-jp.com

本社・横浜工場

水中測器製造部門（白河）

TSK AMERICA, INC.

TSK Liaison Office in India

神奈川県横浜市鶴見区中央二丁目2番20号
TEL 045-521-5252 FAX 045-521-1717
福島県白河市大信中新城字弥平田17-5
TEL 0248-46-3131

46208 SE 139th Pl, North Bend, WA 98045, U.S.A.

Level-12, Building No.8, Tower-C
DLF CyberCity-II, Gurgaon-2, India

アカデミア メランコリア (第23回) (若手のコラム)

カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリプス海洋研究所(日本学術振興会 海外特別研究員)

桂 将太

今年の4月よりスクリプス海洋研究所に移り、Janet Sprintall 博士の下でバリエイヤーと呼ばれる塩分成層について研究をしている。こちらで慣れない英語の手続きなどで疲弊している最中、‘大好きな’先輩から久しぶりに連絡があったかと思えば今回の執筆依頼である。本来であればアメリカ生活について書けば良いのだろうが、執筆時点では何もネタがなく、一方でメランコリア的なことはキリが無いので、ここでは私が海洋学者になった経緯について書かせていただければと思う。



そもそも研究者を志したのは高校3年生の時である。当時は将来の目標や夢などないまま受験勉強に追われていた。ふと「今からでも目指せるプロは何だろうか」と考え、「勉強を頑張れば研究者になれる」という結論に達し、特に研究したい分野もなく、大学院などの仕組みも知らないまま、博士課程に行って研究者になることに決めた。東大に入学後、何を思ったかアメフト部に分析スタッフとして入部した。東大は2年生の後期に成績に応じて希望する学部学科に振り分けられるのだが、残念ながら成績が足りず(けして部活のせいではない)、当時希望していた理学部物理学科への進学は絶望的であった。そんな時に「地球惑星物理学科」という名前を見つけ、「物理」が入っているという理由だけで進学先に決めた。

学科進学後は、月曜以外は夕方から夜まで練習、帰宅後は深夜まで対戦相手のビデオを分析、翌日は授業が終わり次第、部室で分析内容を参考にその日の練習メニュー作成、という我ながらストイックな生活を送っていた。そして4年生になると深刻な問題に直面した。地球惑星物理学科には卒論がない代わりに、特別演習という必修の授業があった。これは、教員1人につき学生が1人か2人付いて、一緒に論文や教科書を読み、データ解析や実験などの研究を行う、というものである。まず初日に教員の方々から演習内容に関しての説明があり、後日、担当教員が決まり次第、時間帯や頻度を相談しながら演習を進める、という仕組みである。ただ、週6日で部活がある私にとってこの授業は絶望的であり、未だに希望する研究分野がなかった私は留年を選択肢に入れていた。それでも初日の説明会に出席したところ、事前に全教員のホームページをチェックしたという同期(現在ウッズホール海洋研究所所属の伊地知君)から、教員の中にアメフト部のOBの人がいた、と教えてもらう。そしてアメフトのボールの柄が入ったトレーナーを着た、OBらしき人のプレゼンが始まった。これがアメフト部の先輩であり指導教員である岡 英太郎さんとの出会いである。その後、岡さんと連絡を取り、部活のない月曜日とアメフトのオフシーズンに演習をやっていただけることになった(念のため書いておくが、演習の単位取得に必要な演習量、レポート提出、研究発表はちゃんとクリアし、不正は一切無い)。この岡さんとの演習をきっかけに海洋物理学に触れたことで、今では海洋学者という形で、高校生の時の「研究者になる」という目標はひとまず達成できたわけである。

人生は何事も「ご縁」だと思っている。もしアメフト部に入らず、伊地知君が岡さんのホームページを見ていなかったら、私は海洋学者にはならず、海洋学会にも所属せず、今こうしてアメリカで生活を送ることもなかっただろう。人生、どこにご縁があるかわからない。これまで出会った方々や海洋学会の皆様とのご縁に感謝すると同時に、これから出会う研究者の方々のご縁を大切にしながら、これからも研究に励んでいきたい。

編集後記



今号は、おめでたいニュースをお伝えすることができました。日本海洋学会の会員の方から、3名の会員に大きな受賞がありました。受賞された皆様、改めておめでとうございます。今後のますますのご活躍を期待いたします。

さて、今回のニュースレターでは、学会記事⑤に着目頂きたいと思います。この記事は、会計担当の安田幹事が纏めてくれたものですが、この記事では、年度ごとの収入や支出について、詳しく解説しておりませんので、ここで少し記載しておきます。神田会長が前号でも述べられていますが、他の学会同様に日本海洋学会でも会員数の減少が続いていて、年度ごとの収入は、2014年以降、収入は減少傾向が続いています。幹事会の方では常に支出を抑える努力を続けておりますが、一般にこれまで実施してきた事を止めるという決断は簡単な事でなく、支出の減少は収入の減少に比べて大きくありません。そのような中で、13ページの2019年度の事業費(支出)が500万円程少なくなっている事に、お気づきになりましたで

しょうか？ これは、日比谷前会長をはじめとする前役員らの尽力により、JOの出版に関し出版社との契約を見直した結果、支出を大幅に減額出来た部分です。大変大きな財政上の貢献ですが、これにより2019年度は事業運営が楽になるかと思われたのも束の間、実際には会員数の減少もあり、少しの黒字に留まりそうであるというのが、13ページの表から読み取れます。逆に、もしJOの契約見直しが行われず、これまでの事業をそのまま進めた場合には、既に今年度から財政状況は火の車になるため、事業の縮小が必須となっていました。ただ今後も会員数の減少が続く事は容易に予測できるため、新たに会員になってくれそうな方への勧誘と、活動内容をできるだけ維持したまま支出を削減する工夫が必要です。

我々会員が海洋学の魅力やメリットを広く伝えて、国内の大学の学生や職員や研究所の職員のみならず、外国や企業などからも、多くの方が日本海洋学会に入会されることを期待したいと思います。

(編集長：安藤 健太郎)

広告募集

ニュースレターは学会員に配布される唯一の紙媒体情報誌です。
海洋学に関連する機器や書籍の広告を募集しています。
お申し込みは日本海洋学会事務局またはニュースレター編集委員長まで。

〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町 2-15 国立研究開発法人海洋研究開発機構
電話/FAX 046-867-9462 / メール andouk@jamstec.go.jp

JOS News Letter

JOSニュースレター
第9巻 第2号 2019年8月1日発行

編集 JOSNL 編集委員会

委員長 安藤 健太郎 委員 根田 昌典、張 勁、中田 薫

〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町 2-15

国立研究開発法人海洋研究開発機構

電話/FAX 046-867-9462

メール andouk@jamstec.go.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町 68

西川徹ビル 1F

http://www.smash-web.jp

発行



日本海洋学会
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F

(株) 毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

※表紙の写真は、海洋地球研究船「みらい」からのラジオゾンデ観測 (JAMSTEC 提供)。記事タイトル横の写真は JAMSTEC 提供による CTD 水中写真および青森県尻屋崎の風景です。会員からの写真を随時募集しています。